

千葉開府の日記念

千葉氏フォーラム議事録

1部／講演

講師 小野 正敏 氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)

テーマ「饗宴に読む頼朝の御所」

■平成29年6月4日(日)

■千葉商工会議所第1ホール

○小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授） よろしくお願ひいたします。私が最後ですが、余り食そのものにはかかわらない話になりますので、せっかく食べ物で盛り上がっていた話を壊して申しわけないなと思うのですが、私のほうは、今回の主題であります塙飯という儀礼が行われた場所、空間からの問題についてお話ししたいと思います。

どんな場所で塙飯が行われたのかという話だけでは、おもしろくないと思いますので、前半は具体的な話をしながら、その場所、あるいは、そこで行われた儀礼が武家にとって、どういう意味があったのか。そして後半は、実はそういうものが鎌倉時代以降もずっと継承されていく。武家の論理を形成していく上で、この鎌倉の塙飯というものが果たした役割。先ほど田中さんのほうからは歴史的な位置づけをしていただいたと思いますが、塙飯そのもののあり方やその舞台となった場の問題をからめて、饗宴から中世という時代をみてみたいと思います。私は飲んで遅く帰るといつも嫁さんから文句言われるのですが、いやいや、飲み会こそが社会関係をつくる大事な場なのだと。そこで全てが決まってしまう、飲み会なくしては成り立たんということでもいい訳をします。嫁さんはにまっと笑っていますが。本当ですと、私も宴会の話大好きなので、そちらの話をしたいのですが、きょうは場の話です。

先ほど田中さんのお話にもありましたように、塙飯というのは、武家社会だけではなく古代から引き継いでいる非常にかたい宴会といいますか、儀礼としての饗宴ということになります。一方、古代もそうだったのですが、中世には、もう1つ、さらにくだけた、もっと仲間意識の確認のために飲むような別の宴会が盛んになってきます。実はそのふたつは全くばらばらのものではなくて、前半で塙飯のような、かちっとした儀礼の饗宴があると、その後、この絵巻の場面のようにくだけた宴会がセットとなる。この2つがあって、実は世の中が回っているという、この問題であります。多くの例では、それは同じ場所、建物や部屋ではしなくて、場を使い分けながらやっていきますので、その場の使い方、あるいは宴会の中身によって、どんなことがわかるのかという話になります。私は盛りだくさんに、最後は戦国時代までずっと繋がる話をしようと思っていますが、30分ですので、たどり着けるかどうかはわかりません。もし途中で終わってしまいましたら勘弁していただきたいと思います。

塙飯と大倉御所

最初に、鎌倉將軍邸を確認しておきましょう。舞台となった頼朝の御所は大倉というところにありました。写真は現在の鎌倉の航空写真の上に当時の主要な道路を重ねたもので

す。鎌倉の中心になる鶴岡八幡宮、その東隣に大倉の御所がつくられました。これも有名な記事ですが、頼朝は、治承4年（1180年）12月12日に完成した大倉の御所へ入ります。そうしますと、関東の御家人たち311人が集まってきて、周辺にそれぞれ自分たちの屋敷を構えた。これが武士の都、鎌倉の始まりであり、現在につながってくる都市へと発展する原点とされています。

頼朝が大倉の御所のどこへ入っていったかといいますと、寝殿という中心の建物でした。そして御家人たちはといいますと、侍所という別の建物に入りました。そこでは当時、有力者でありました和田義盛が、誰が来たかという着到をチェックしています。それによって、頼朝のところにどういう人たちが来て、つき従っていったのかをチェックするというをやっていたわけです。この侍所は約36m以上もある細長い建物で、御家人達は2行対座、向かい合って座ります。侍所というのは、京都の公家の屋敷にも存在する建物ですが、後でふれるように武家方では重要な意味をもつようになります。

大倉の御所が持っていた機能というのは、単に将軍が生活する屋敷、館ということではなくて、ここで政治も行いますし、儀礼も行います。もちろん日常生活の場でもあります。特に鎌倉のトップとして、都との儀礼などの行事が行われるために、それにふさわしい屋敷であることが求められました。さまざまな要素がこの大倉の中に重なっていたということになります。この新邸では、その完成を祝って12月20日に三浦義澄の垵飯があり、その後安達盛長邸へ御成始が行われています。

きょうは垵飯をキーワードにしておりますので、「吾妻鏡」のなかから2つの垵飯の記事に注目しましょう。

史料1は、建久2年、これは先ほども出ていましたよね。1191年の正月の垵飯、まさに千葉常胤が献じた垵飯です。

史料2は、建久6年（1195年）の正月の垵飯です。このときには足利義兼が垵飯を献じています。元旦が義兼、2日が実は千葉常胤で、3日は小山朝政でした。このように有力な御家人が元旦、2日、3日、中には5日なんていうのもありますので、日を変えながら、垵飯を献じるということで、先ほどの田中さんが話したように、そのときの御家人の序列といいますか、幕府内での位置関係が視覚化される場であり、そこに意味がありました。

今回私がこの2つの記事に注目したのは、具体的に場の問題が出てくる記事は、このくらいしかないからです。まず建久2年正月の例をみてみましょう。午の刻、ちょうど

お昼に頼朝が寝殿の南の面に出座してきた。そうしますと御簾を上げて始まります。先ほどのお話に出てきたような進物が千葉一族によって次々に出されてきます。庭のほうには馬4頭が並べられて、これも進上される。これらを庭の儀と言っていますが、庭と寝殿とがセットでこういう儀礼が行われます。そして、それが終わると御簾が下がって頼朝は寝殿の奥へ退座というわけです。

後でまた図を使いながら説明しますが、この場面で大事なのは、頼朝は寝殿の南面に、そして、御家人たちはというと、庭のところに列をなして祇候しているということになります。建物の内と外、それから高い建物と低い庭というふうに、まさに先ほどの話のように身分関係、主従関係というものが表現される形で場が用意されていた。堀飯の舞台は、寝殿、特にその南面と南の広庭から構成されていたのです。

そして庭の儀が終わった後、次ぎに、頼朝は寝殿の西面、今度は西側のほうのひさしのところに出て行って、そこで御簾が上がって盃酒歌舞に及ぶとあります。にぎやかな宴会が始まったということです。ただ、このときに西面の場で御家人たちと一緒に酒を飲み合ったかどうかというのはよくわかりません。実は私は違う、ここに御家人達はいなかったと思っています。

それはこちらの記事と関係があるのですが、建久6年の正月の堀飯の記事を見てみましょう。恒例のように堀飯が献じられました。続いて大内惟義が剣、弓矢、そして馬など進上しました。それが終わりますと、事が終わって、将軍はまた奥へ下がります。さらに再び出座したのですが、今度は西の侍（侍所）という建物でした。これは寝殿とはべつの建物になっていて、例の細長い建物です。そこへ出て御家人たちと一緒に「盃酒数巡」に及びます。ここでは、御家人達が比較的自由にそれぞれに群れ集まって酒を交わしています。我々も立食パーティーをやると、仲のいい友達同士、わっと集まって、くだけたようすになるわけですが、あのスタイルのようです。実はこの2段階の饗宴があることが重要です。

将軍御所と寝殿造

図1は2つの御所を比較したものです。左側は、当時、都の一番の権力者でありました院の御所、後白河法皇の六条御所です。右側が将軍の御所、頼朝の第2期大倉御所です。大倉の御所は、2回建て直しをされています。治承4年に頼朝はこの御所に入りますが、その後、建久2年3月に小町大路から火事が出て、鶴岡八幡宮や大倉御所が燃えてしまいます。その時再建したのがこの図ということになります。

そして、この御所もまた焼けてしまいます。建保元年5月和田義盛の乱のときです。その時は代がかわって3代実朝が将軍でした。また同じ場所に御所がつくり直されます。この話は後でまた触れたいと思いますが、御所のあり方が頼朝段階と、実朝段階で大きく変わっていくのです。それは単に御所の建物の構成が変わったというだけではなくて、そこに反映された将軍と御家人たちとの関係、精神的なつながりの問題等で大きく変わったといえます。さらには源氏将軍が絶えて、都から将軍を迎えるともっと大きな変化が起こることになります。

院の御所と将軍御所を比較すると、たいへん似ていることがわかります。皆さんも教科書で習ったと思いますが、この時期、偉い貴族等の屋敷は寝殿造と言われている屋敷でした。大きく方形の敷地を持っていて、その中に寝殿という一番中心の建物があって、その南に広い庭があり、さらに大きな南池を持っている。この寝殿を中心に、これに廊下状の建物で対と呼ばれる複数の建物がつながって全体の構造ができているという形をとっています。

両者は、典型的な寝殿造の屋敷として、規模もよく似ているように復元されています。これは太田静六さんという建築史の第一人者が復元した模式図です。もちろん発掘されていませんので、『吾妻鏡』の中に出てくる、例えば寝殿をはじめ、「釣殿」、「西の対」や、先ほどの「西の侍」といったような建物名を検討して、当時の寝殿造の構造の中に当てはめていくと、こんな復元ができるという成果です。太田さんは、この時期の将軍御所に中門廊がないこと、また規模の大きな厩をもつことが特徴だと院の御所との違いを指摘しています。

この図で、堀飯の舞台となった寝殿と広庭のセットの部分、それからもう1つ、第2部の宴会が行われました西の侍所などの位置関係を確認してください。

これを、同じ屋敷ではありませんが、スケッチ図に直しますと、図2になります。寝殿や南の庭、池、そして侍廊（侍所）、二棟廊など、寝殿造の屋敷の景観がわかると思いますが。注目してほしいのは、ここにある門を持っている廊、中門廊です。この廊を境にして、屋敷の内部空間が内側と外側の空間に分けられていることです。屋敷外部とつながる表門はこれです。ここから屋敷内に入りますが、この中門廊があることで、内部にランクが違う空間構造が作られていたということが特徴です。そして、訪問者の身分によってどこまで入れるかが区別されていたのです。

それから、もう1つ建物の構造的な特徴です（図3）。すごく立派な建物なのですが、

実はこういった建物は、お寺の本堂と同じような構造になっているのです。どういう意味かということ、やたらに大きくて柱が並ぶのですが、内部を仕切る壁や建具が非常に少ない。要するに1つの大きながらんとした箱のような空間になっています。それでは使いにくいので幾つかの方法で仕切るのですが、その時々目的にあわせて空間をつくるのが自由になる。そのとき用にレイアウトできわけです。今日のこの会場と一緒に。きょうはちょっとお客さん少ないから、がらがらしているから、そこでアコーディオンカーテンで半分に仕切っちゃおうか、今日は講演会だから椅子をたくさんいれてスクリーンで説明できるようにセットしよう、そういうやり方ができるということになります。

寝殿造の建物の建具も大変特徴があります。内外を仕切るのが半蔀^{はしとみ}、しとみという方法です。雨戸のような機能ですが、上下に分かれていて、昼間は下半分は外し、上半分はもちあげて軒の金具にひっかけておきます。出入り口のところだけが妻戸という、観音開きの戸がついています。しとみの内側には目隠しに御簾という、簾のようなものがかかっています。つまり、これらをあけることによって、ここが広い開放空間になっていく。この絵巻の場面は、しとみをあけて御簾だけになっている状況です。

なぜそういうことなのかといいますと、寝殿造の建物が持っている機能は、寝殿の特に南側に面しているひさしの部分とこの広い庭とがセットになって、屋外と屋内とが一体となった空間でいろいろな儀礼をする機能を重視していたということになります。こういった寝殿でも北側の儀礼などに使われない奥半分のほうは、もうすこし細かく壁や建具で仕切られていて、そこに將軍の日常的な生活空間がつけられているという構造をとっているわけです。

先ほどの堀飯の記事（史料1，2）を思い出していただくと、その意味がわかると思うのです。頼朝が寝殿南面に出座した。それはどこかということ、実はここに出てきているのです。こんな奥のほうにいたら、庭に集まった御家人たちからは姿は見えませんが、身舎という建物の中心の部分から南のひさしと呼ばれるこの開放空間がその場になります。ちょうど庇と簀の子とよばれる縁の境に柱が立っていますが、ここに先ほどの半蔀と簾がかかっている、この簾を巻き上げると、頼朝がいるこの席から対面できるという構造になっていたわけです。寝殿の西面に出座ということは、今度は逆に西のひさし、ここへ出てきたということです。

先ほどの記事に続いて、例えば建久2年の頼朝が征夷大將軍になったときに京都のほうからそれを伝える辞令書を勅使が持ってきます。そして、同様にこの場で面会をするわけ

ですが、身分の低い御家人と違って、この時は勅使も寝殿に上がって献盃が行われています。また、勅使にお土産に渡す馬は庭に用意され、勅使は庭で受け取って退出します。このように寝殿と庭がセットで使われていく状況がおわかりになっていただけたらと思います。

こちらは建久4年の正月の行事で、これも千葉が塀飯をやっていますが、源氏一門、北条時政をはじめ、御家人一同も庭に祇候していた。つまり彼らは、この段階では寝殿側には上げてもらえないということです。さらに庭に伺候するときの席次というものが非常に大事になります。特にこのときの記事はおもしろいのですが、将軍が自筆で「人々座敷次第」、つまり御家人たちの席次をこのときに決めたというわけです。そのくらい宴会の席——宴会と言っただけではいけません。これは儀式ですね。儀式の席次というものが各自の社会的地位、御家人の中での序列というものをそのまま反映する大事な場面だったということになります。私は、常々嫁さんに、だから宴会に行かないとだめなんだと言っています。そこにいないことは論外だよと。もちろん、座の一番上に座っていられれば格好いいけれどもという話になるわけですが。塀飯における場と席次は、まさに将軍と御家人の主従関係、身分格差と御家人同士の序列を示す場であったといえます。

ふたつの饗宴と場の意味

ちょっと先を急ぎましょう。このままでいくと戦国時代までいかれそうもなくなってきました。さっき確認したように、2つ重要なキーワードがありました。寝殿と侍所という2つの空間でした。これは何でこだわるかといいますと、塀飯にみてきたように、御家人たちは庭のほうに祇候しました。垂直関係、そして建物の内、外という意味で身分序列、主従関係を確認するという儀式が行われていた。そこに私が将軍、あなた達はつき従う御家人だぞという関係を確認しました。ところが、その後、西の侍にわざわざ将軍が出ていったというわけです。

これは普通、都の貴族の世界ではあり得ないことなのです。寝殿がここ、西の侍（侍所）は、これです。院の御所ではこちらの侍廊という廊状の建物です。寝殿造には中門廊という、れっきとした施設があって、屋敷の主人はこの中門廊の外側にある、ランクが低い建物には絶対出ていかない。位の高い客と会うときや正式な儀式は寝殿でやる。もうちょっとランクが落ちるような儀礼のときには東の対、あるいは二棟廊が接客に使われます。それを、わざわざ頼朝は侍所に集まった御家人のところへ出て行って一緒に宴会をしていたということになるわけです。実はそのために、本来ならここにあるべき中門廊とい

う、空間を二重構造にする施設が大倉御所にはないのです。御所のあり方が將軍の御所と後白河法皇の六条殿とは全く論理が違うということに気がつきます。

この違いを前提にまとめなおすと、寝殿は公的な儀式空間として、それが使われる。一方、侍所というのは、どちらかというと、擬制的な源氏のイエとして御家人たちとの交流空間になっていく。御家人たちにとって、公的な儀礼の場所では、私は御家人で、あなたが將軍という関係だが、自分らの腹の中には、私らがあなたを推戴し盛り立てて、東国の武家政権を打ち立てたのではないかと。むしろ、自分たちの代表みたいなものだよという意識が常にあるわけです。そういう御家人たちとの交流空間として侍所の饗宴が機能していくということになります。もちろん先ほども言いましたように、都の公家や寺家の屋敷などでも一定のクラスならば侍所、侍廊と言われる同じような建物はありますが、そこはまさに家政機関として、誰が来たという出勤簿が置かれていたり、そこに侍る、管理する空間で、こういう形では使われていないということに注目したいと思います。

ところが、東国武家の棟梁である將軍としての特徴が、頼朝から実朝へと代が変わるなかで、意識もだんだんと変化していきます。その象徴的な出来事が建保元年（1213）の御所の再建でした。この年5月の和田義盛の乱で焼失した御所を再建することになります。新しい御所をつくるという議論が將軍の御前において行われた。そうすると、そこで実朝は、示された指図、図面をみて改めるように指示します。頼朝段階の御所とは変えて、このたびは中門を建てるべきだと言うわけです。先ほど言いました頼朝段階の御所には武家の御所として、中門廊という、屋敷内をランク分けしていたあの廊を持っていなかった。それをつくるべきだという言い方によって変わっていくわけです。簡単に言えば、公家的な御所にしていこうということを前面に出してくるわけです。その延長では当然ですが、実朝以後の將軍は、侍所に出座して御家人とともに宴会をすることも無くなります。將軍と御家人の意識、立場に変化がおきたことを示しているのです。この頃から次第に垵飯をつとめる者が、北条一門に限られるようになるのも同じ変化といえます。

同じ年にその雰囲気伝える記事が残されています。長沼宗政という御家人が、こんな言葉を残しました。「(頼朝の頃は) 武備というものを重んじたのに、当代(実朝)になったら和歌だとか、蹴鞠などを業として、武芸が廃れてしまった。女性ばかりが重用されて、勇士はいないようだ」、こんな恨み事を言うくらい、京都を向いた姿勢に変わってしまったことになります。

戦国時代に継承される饗宴

さて、残り時間が5分ぐらいになりましたので宴会の話に戻します。垵飯と関連づけて、2つの饗宴があって、それぞれ2つの場があったという話をしてきました。その饗宴と場の2つのセットは、戦国期の武家社会にもずっと継承されていきます。例えば、豊後府内（大分市）に本拠をおいた大友宗麟の正月行事です。正月29日に「大おもて節」がありました。このおもてというのは、寝殿に相当する建物が戦国期には表の御殿とか、あるいは主殿と呼ばれており、そこで行われる正月の行事のことです。この正月行事は領国中の家臣や国衆たちが集まってきて、大名大友氏との関係を確認する行事で、垵飯と同じように各地からいろんなものを献上して、そこで饗宴が行われました。この大おもて節の前半は、式三献という対面儀礼でした。これは垵飯と同じような意味をもち、式三献という結婚式の三々九度みたいな主従関係の契約、確認という儀式です。その後が続くのが、乱酒でした。「乱酒、その限りなし」というわけです。延々と乱痴気騒ぎの飲み会が続きます。そして、「きょうはいかようにもゆるし候」というわけですから、この時ばかりは上下を意識しない無礼講の宴会で、何をしても許される日だという言い方なのです。その結果は「諸人沈酔」、みんな沈没しちゃったという話になってきます。つまり、公式の主従関係を確認する式三献の対面儀礼があって、その後、無礼講の宴会というものがセットであることが確認されます。近年、この舞台となった大友館では、屋敷の南半分に大きな池庭が発掘されています。

乱酒の雰囲気がこの絵巻です。これは15世紀初めですが、まさに乱酒の世界がこんなふうな絵巻の一コマになっています。正面に座るのが亭主です。先ほど村木さんの話にあったかわらけを盃にして折敷にもられた肴をつまみながら、にこやかに飲んでおります。その前では、後家さんと男が上半身裸になって、じゃんけん、拳のゲームに熱中している。おもしろい、おもしろいといって喜んでいきます。座敷の奥の女性は琴を前に置いているので演奏しているのかなと思ったら、よく見ると、実はかわらけを持っている。一緒になって飲みながら宴会に参加しているのです。その結果、座敷の外では、飲み過ぎた、「おえっ」というのをやっているという光景です。

こうした正月儀礼は、決して豊後府内だけではありません。次ぎに北のほうへ行きましょう。南部（青森県）です。八戸の根城に本拠をおいた南部氏の正月行事では、本丸の表の亭（表の御殿）、奥の亭（奥の御殿）が舞台でした（図4）。元日は奥の亭で狭義の南部家、家の中の対面儀礼、南部では「三献肴法」と呼ぶ式三献が行われました。

2日目はというと、まず奥の亭で家内のお祝い事が行われて、次に、表の亭（表御殿）

に出て、そこを会場に有力な家中である新田、中里、沢里氏をはじめ、領国の家中が集まってきて、ここで同じように式三献の対面儀礼が行われました。これは領国統治を意識した公的なものです。年頭にあたり今年も南部の当主を支えていきますという契約儀礼です。その時、酒を注ぐのは、南部家を象徴する先祖伝来の重宝の甲冑を着けた年男でした。その後、続いて一揆的に家中全員に盃が回るというわけです。正式な対面儀礼と無礼講のセット関係ということになります。このようにみると、垵飯という場面だけでは半分だけしか見てないということになります。垵飯とともに、続いてもう1つの儀礼があったことが武家社会の本質を映し出して重要だと考えられます。

先の描かれた乱酒の場面を見ていきますと、先ほどの村木さんの話と似てくるのですが、そこに幾つも描かれている唐物の道具が興味深いです。こちら側には、銅の提子という片口をもつ酒をそそぐ道具に中国製の梅瓶、首の細い壺からトトトッと酒をついでいきます。この提子から各々のかわらけに酒をついで皆さんが召し上がるわけです。またこの口の大きな青磁の壺は酒海壺、まさに名前のおり酒をなみなみと満たして宴会の場におかれる器です。こちらが青磁の大皿で、これには果物が盛られます。このように描かれているのはみんな酒の道具、酒器なのです。

こうした道具が、鎌倉の上層部の屋敷今小路西遺跡の発掘では大量に出土しており、これが使われていたことがわかります。また同じような道具が越前（福井県）の戦国大名の朝倉館などでも骨董品として使われ、一部は座敷飾りとして儀礼や饗宴の場を飾っていました。武家の世界にとって、鎌倉時代からの酒器というものが戦国期になっても、自分たち武家の社会の権威を示す道具として人々をもてなすときの会場など、座敷飾りの中に使われていることに注目します。そうした道具が所有者の権威を象徴するモノとしてこれみよがしに飾られたのです。

その意味は何なのかということですが、武家の権力の源泉は、主従関係によってできているということなのです。その関係を契約、確認するために垵飯をはじめ、先のような年頭の対面儀礼がおこなわれる。その儀礼に使われていた道具。それが象徴的な権威の道具として、後世になっても価値が見出されて、これが後生大事にされていく世界があるのだということになります。特に戦国時代においても、室町将軍をはじめ、各地の戦国大名は、武家権力のルーツとしての鎌倉殿＝鎌倉将軍を崇め、意識していますので、垵飯、御成のような儀礼やそうした場で使われる道具などが継承されていったというのが私の考えです。

ちょうど時間になりましたので、私の話はこれで終わります。垵飯などの饗宴とその場、道具から武家の本質が見えてくるということに注目いただければ幸いです。ありがとうございました。（拍手）

史料 1

『吾妻鏡』建久 2（1191）年正月 1 日条（1 期大倉御所）

「千葉介常胤献垵飯。（略）午刻前右大将出御南面。前少将時家朝臣上御簾。先有進物。御劔千葉介常胤。御弓箭新介胤正。御行滕沓二郎師常。砂金三郎胤盛。鷲羽納櫃。六郎大夫胤頼。御馬千葉四郎胤信（略）。庭儀畢。垂御簾。更出御干西面母屋。被上御簾。盃酒及歌舞

史料 2

『吾妻鏡』建久 6 年（1195）正月 1 日条（2 期大倉御所）

「上総前司（足利）義兼献垵飯。相模守（大内）惟義持参御劔。又御弓箭以下進物。事終將軍家（頼朝）更出御干西侍障子之上。盃酒及数巡。私催群遊云々」

図版キャプション

図 1 院の御所と將軍の御所

太田静六 1987 「寝殿造の研究」挿図に加筆

図 2 寝殿造の屋敷景観

川本重雄 1996 「貴族住宅」『絵巻物の建築を読む』挿図に加筆

図 3 寝殿の建築構造

川本重雄 1996 「貴族住宅」『絵巻物の建築を読む』挿図に加筆

図 4 根城本丸模式図

八戸市教委 1993 「根城本丸の発掘調査」挿図に加筆